「朝の読書」に関する縦断的研究（２）

中村 豊
（関西学院大学）

【要旨】
本研究は、筆者が 2009 年に実施した質問紙調査の継続研究である。調査対象者は前回と同じＡ大学及び新たなＢ女子大学の学生 395 名であり、回想法により小中高における朝の読書の実施状況の実態と学生評価、読書習慣の形成等について尋ねた。
得られたデータを整理・分析した結果、前回と同様に朝の読書の実施の有無と読書習慣の形成には有意な差があることに加え、今回の調査結果からは、朝の読書を肯定的に評価している学生の方が読書習慣の形成が有意に高いこと、高校では教師の読書の有無と朝の読書の評価に有意な差があること、朝の読書の評価では否定的な回答が全ての校種において一定の割合で見られること等が得られた。それを踏まえ、朝の読書の実態を「４原則」の視点から検討し、今後の新たな課題を指摘した。

1.問題と目的

「朝の読書」とは、「学校において教育課程に位置付けられた授業が始められる前の一定時間、一人ひとりの児童生徒が自分で選んだ本を黙読する教育活動である」[1)]。筆者は、日本生涯教育学会第 30 回大会自由研究部会Ⅲにおいて、大学生を対象とした質問紙調査の結果に基づいた朝の読書に関する報告を行っている[2)]。そこでは、朝の読書を経験してきた学生は、朝の読書未実施の学校に在籍していた学生と比較して χ^2（カイ 2 乗）検定の結果、読書習慣の形成に有意な差が見られた。また、学生の自由記述分析より、朝の読書実施校では生徒指導の機能が発揮され、学級集団に落ち着きのある学習環境を醸成していることが示唆された。これらの点より朝の読書の教育的な意義を示すことができた。

しかし、現在の学生は平成 20 年度告示の学習指導要領による教育課程施行の影響により、朝の読書をとり止めて、いわゆるドリル学習に移行する学校が多いと言われる状況の中で学校生活を過ごしてきている。同じ頃、朝の読書の提唱者であり、全国に広がる契機となった実践者である林公氏は、高校における朝の読書について次の課題を挙げている[3)]。

> 朝の読書実施調査において高校では低い水準であるが、高校を卒業すると本を読むチャンスはさらに少なくなる可能性があるので改善を要する。／「読書よりも計算や漢字ドリルのほうが大切である」「読書よりも進学のための受験勉強のほうが重要である」といった考え方が、依然として現場の教師の半分、いやそれ以上に根強く存在している。／「文部科学省や教育委員会がやれというからやるだけ」という学校も多い。

上述したように、朝の読書は多くの課題を抱えている。それゆえ今後は、実践校を増や

すという定量的な側面だけに止まらず、朝の読書の４原則「毎朝、（各自が）好きな本を、（教師を含めた）みんなで、ただ読むだけ」に基づいた実践という質的な側面を検討し、朝の読書の教育効果や教育的な意義をエビデンスベースで実証していくことが求められており、このことが朝の読書に関する研究の問題である。

それでは、現在の朝の読書の実態はどのようになっているのであろうか。本論文では、朝の読書を全国に広める推進運動の中心となっていたトーハン（朝の読書推進協議会）が定期的に実施している「朝の読書実施学校数の推移」[4]調査、毎日新聞社と全国学校図書館協議会が毎年実施している「学校読書調査」[5]、文部科学省が隔年で実施している「学校図書館の現状に関する調査」を手がかりとして、まず、小中高の朝の読書の現状について明らかにする。朝の読書推進協議会（2015 年 3 月 30 日現在）によると、総実施校数 76%、その内訳は小学校 80%、中学校 81%、高校 44%である。義務教育段階では 8 割を超える実施状況であるのに対して、高校になると 4 割半ばであることが示されている。また、同会は、2014 年 1 月 28 日に「『朝の読書』２５周年記念アンケート」結果[6]を発表し、その概要を以下のようにまとめ報告している。

（回答者）755 名の内 250 名が「朝の読書」を経験しており、半数以上（56%）が 20 代以下という結果でした。若い世代ほど浸透しており、25 年間で広がった運動の成果が裏付けられました。「朝の読書」を経験した学校（複数回答）については、経験者に占める割合が小学校 68%、中学校 56%、高校 17%で、朝の読書推進協議会調べによる全国実施率調査と同様に小・中学校で朝の読書を経験した人が多いことがわかりました。次に、年代別実施率を見ると 10 代では回答者の 93%、20 代では 67%が「朝の読書」を経験しており、全国で「朝の読書」を実施する学校が急速に増えた 2000 年以降に学校生活を送った 20 代までの実施率が高くなっています。

上に述べられているように、朝の読書は、その普及とともに学校における読書活動を経験する者の割合が増えている。次に、第 60 回学校読書調査の結果を参照する。そこでは、毎年の同じ質問項目である「５月１か月間に読んだ本の冊数」「読んだ本の書名」「５月１か月間に読んだ雑誌の冊数」「ふだん読んでいる雑誌名」と、新たな質問項目を調査している。その主な結果[7]は、以下のように報告されている。

2014 年 5 月 1 か月間の平均読書冊数は、小学生は 11.4 冊、中学生は 3.9 冊、高校生は 1.6 冊になっています。昨年度に比べ、小学生は大きく増加していますが、中学生・高校生は減少しています。今後は、平均読書冊数の数値に一喜一憂するのではなく、読書指導にいっそう力を入れる必要があります。
5 月 1 か月間に読んだ本が 0 冊の生徒を「不読者」と呼んでいます。今回の調査の結果では、不読者の割合は、小学生は 3.8%、中学生は 15.0%、高校生は 48.7%となっています。昨年度と比べ、小学生・中学生は減少、高校生は増加となりました。

上の調査結果は、1984 年以降の実態について経年比較をすることが可能である。それによると、この 20 年間では書籍は増加傾向にあり、不読者については特に中学生に於いて

改善されている傾向を見ることができる。しかしながら、高校では一層の読書指導が求められている指摘は看過できない問題であると思われる。それは、義務教育段階では朝の読書の普及が進み、その実践においても「図書の読み聞かせの実施」や「ブックトークの実施」等、さまざまな工夫がなされ、読書指導の充実が図られているが、先述した林公氏の指摘にもある通り、高校になると読書離れが顕著になる点である。このことは、平成 24 年度『学校図書館の現状に関する調査』[8]結果（文部科学省児童生徒課、平成 25 年 3 月 28 日）においても同様の問題が示されている。そのことについて以下に述べる。

本調査では、読書活動の状況調査を行っている。全校一斉の読書活動の実施状況は、小学校 96.4%、中学校 88.2%、高校 40.8%である。そのうち朝の始業前に実施しているもの、つまり、朝の読書の占める割合は小学校 91.6%、中学校 94.5%、高校 78.8%であった。このことから、小学校・中学校では全校一斉朝の読書活動が広く行われていることが示されている。半面、高校の全校一斉朝の読書の実施状況は 3 割超程度の状況である。

ところで、第 2 期教育振興基本計画（平成 25 年 6 月 14 日閣議決定）では、4 つの基本的方向性に基づく方策のひとつに「社会を生き抜く力の養成」を掲げ、また、30 の基本施策の「施策 11 現代的・社会的課題に対応した学習等」に「読書活動」を明示している。このことは、児童生徒の読書活動が極めて大切な教育活動であり、先述した読書調査が実施されているのは、読書指導に関わる社会的関心が高いことを裏付けていると思われる。

以上のことを踏まえ本論文では、現在の朝の読書について、2009 年度と同様の質問紙調査を実施することで、その実態と課題を検証していく。そのことで、朝の読書の現状と教育的な効果及び意義について、あらためて論考していくことを目的とする。

2.方法

(1)調査の対象者と調査時期

1)質問紙調査：2009 年度と同じ関西のＡ大学の学生と、本調査では新たに関西のＢ女子大学の学生を調査対象とした。

2)調査時期：2014 年 10 月

3)手続き：筆者が担当する講義時間に、質問紙の目的と内容について学生に説明を行い、授業後に協力を得られる学生に質問紙を配布し、回収することで実施された。また、同僚に質問紙調査を依頼し、筆者と同じ手順で実施された。得られたデータについては統計的に処理し、個人が特定できないようプライバシーに配慮した。

(2)調査内容

質問紙の内容は、朝の読書推進協議会が 1996 年以降実施している質問項目を参考に筆者が 2009 年度に作成した質問紙と同じものを使用した。以下に調査内容を示す。

①性別、②学部、③学年、④小中高毎の朝の読書の実施状況（中等教育学校は前期課程を中学校に、後期課程を高校として回答を求めた）、⑤週あたりの回数、⑥朝の読書時間、⑦教室内における教師の有無と教師の読書の有無（はい、ときどき、いいえ）、⑧朝の読書に関する個人評価を 7 段階評定（とても楽しみ、楽しみ、やや楽しみ、どちらともいえない、やや苦痛、苦痛、とても苦痛）で選択させた。⑨学校の所在地（都道府県）、⑩設置者（国立、区市町村、私立、その他）、⑪読書習慣の形成の有無、⑫校種毎の思い出に残る本についての回答を求めた（小学校は 1 冊、中学校は 2 冊、高

校は３冊までの著者と著名を記述)。⑬自由記述として朝の読書の実施の有無にかかわらず、意見や感想の記入を求めた。

(3)分析方法

得られたデータについて、①②③④⑤⑥⑦⑨⑩⑪の項目は単純集計し、⑧の項目は、「とても楽しみ」「楽しみ」「やや楽しみ」を「肯定群」に、「どちらともいえない」は「保留群」に、「やや苦痛」「苦痛」「とても苦痛」を「否定群」と分類して整理した。また、読書習慣の形成の有無について、朝の読書の実施回数、教師の教室の有無と読書の有無、朝の読書の有無及び評価をクロス集計し、さらに評価と教師の状況についてχ^2検定を行った。⑫の記述については無回答の空欄率を集計した。⑬の自由記述の内容は、教育学を学ぶ学生１名、大学院生１名と筆者による KJ 法により整理分類した。

3.結果

調査対象者は、A大学男子学生 131 名、女子学生 145 名、B大学女子学生 119 名、合計 395 名である（**表１**）。本調査では女子学生の占める割合が高くなっている。

表１　調査対象者一覧

	性別	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	その他	合計
A 大学	男子	80	37	8	6	0	131
	女子	97	32	5	9	2	145
B 大学	女子	119	0	0	0	0	119
合計		296	69	13	15	2	395

また、前回 2009 年度の調査対象者と今回 2014 年度の調査対象者の有効回答者数及び大学入学前の出身地を全国８ブロックと海外に整理したものが**表２**である。本調査対象者は近畿圏、特に京阪神地区出身者の占める割合が高く、９割以上が西日本の出身である。

表２　調査対象者の比較

	2009 年度調査		2014 年度調査	
ブロック	合計(人)	%	合計(人)	%
北海道・東北	0	*0.0%*	3	*0.8%*
関東	9	*4.1%*	13	*3.3%*
中部	8	*3.7%*	17	*4.3%*
北陸	5	*2.3%*	7	*1.8%*
近畿	158	*72.5%*	276	*70.6%*
中国	16	*7.3%*	29	*7.4%*
四国	12	*5.5%*	35	*9.0%*
九州	7	*3.2%*	8	*2.0%*
海外	3	*1.4%*	3	*0.8%*
	218	*100.0%*	391	*100.0%*

質問項目④「小中高毎の朝の読書の実施状況」について、校種毎の実施状況として整理したものが**表３**である。小中高の３校種すべてで朝の読書を経験してきている学生は 94 名（23.8%）であるのに対し、いずれの学校でも朝の読書が実施されていなかった学生は

21名（5.3%）であった。また、全体に占める実施校数は、小学校338校（85.6%）、中学校249校（63.0%）、高校112校（28.4%）であった（**表4**）。

表3　小中高毎の朝の読書の実施状況

実施校数	小学校	中学校	高校	人数	%
3	○	○	○	94	*23.8%*
2	○	○	×	123	*31.1%*
2	○	×	○	5	*1.3%*
2	×	○	○	10	*2.5%*
1	○	×	×	117	*29.6%*
1	×	○	×	22	*5.6%*
1	×	×	○	3	*0.8%*
0	×	×	×	21	*5.3%*
			合計	395	*100%*

表4に校種別の朝の読書実施日数を整理した。毎日実施しているのは、小中高共に6割超である。他方、1日だけの実施は小学校12.4%、中学校10.8%、高校15.3%であり、朝の読書を実施していても、その実態は多様であることが示されている。

表4　各校種と朝の読書の実施日数

	毎日		4日		3日		2日		1日		合計	
小学校	203	*60.1%*	14	*4.1%*	49	*14.5%*	30	*8.9%*	42	*12.4%*	338	*100.0%*
中学校	154	*61.8%*	15	*6.0%*	37	*14.9%*	16	*6.4%*	27	*10.8%*	249	*100.0%*
高校	67	*60.4%*	6	*4.5%*	10	*9.0%*	12	*10.8%*	17	*15.3%*	112	*100.0%*

表5は、朝の読書の4原則である「(教師も含めて) みんなでやる」ことの実態を聞いている。本調査からは、教師の教室の有無は小学校がやや高いが、読書の有無を見ると高校が一番高い回答を得ている。また、中学校では、教師の教室不在、不読書の割合が高い。

表5　朝の読書と教師の状況

	朝の読書の時間、教室に先生はいましたか							朝の読書の時間、先生も本を読んでいましたか					
	小学校		中学校		高校			小学校		中学校		高校	
はい	213	*62.6%*	125	*50.2%*	70	*62.5%*	はい	122	*35.9%*	70	*28.1%*	42	*37.5%*
両方	119	*35.0%*	97	*39.0%*	30	*26.8%*	両方	154	*45.3%*	116	*46.6%*	42	*37.5%*
いいえ	8	*2.4%*	27	*10.8%*	12	*10.7%*	いいえ	64	*18.8%*	63	*25.3%*	28	*25.0%*
合計	340	*100.0%*	249	*100.0%*	112	*100.0%*	合計	340	*100.0%*	249	*100.0%*	112	*100.0%*

朝の読書に対する学生の評価を**表6**に示す。「朝の読書をどのように感じましたか」に対する回答には、「やや苦痛」「苦痛」「とても苦痛」と否定的な評価が見られる。

否定評価の合計は小学校14.9%、中学校20.8%、高校17.1%であった。また、「どちらともいえない」という保留的な評価は各校種共に30%程度あることから、活動の主体者である児童生徒側の評価は、保留的な評価を最頻値とした分布が見られ多様であることが確認できる（次頁　**図1**）。

表６　各校種における朝の読書の評価

	小学校		中学校		高校	
とても楽しみ	42	*12.4%*	27	*11.0%*	11	*9.9%*
楽しみ	59	*17.4%*	32	*13.1%*	19	*17.1%*
やや楽しみ	86	*25.3%*	57	*23.3%*	26	*23.4%*
どちらともいえない	102	*30.0%*	78	*31.8%*	36	*32.4%*
やや苦痛	32	*9.4%*	34	*13.9%*	11	*9.9%*
苦痛	10	*2.9%*	11	*4.5%*	3	*2.7%*
とても苦痛	9	*2.6%*	6	*2.4%*	5	*4.5%*
合計	340	*100.0%*	245	*100.0%*	111	*100.0%*

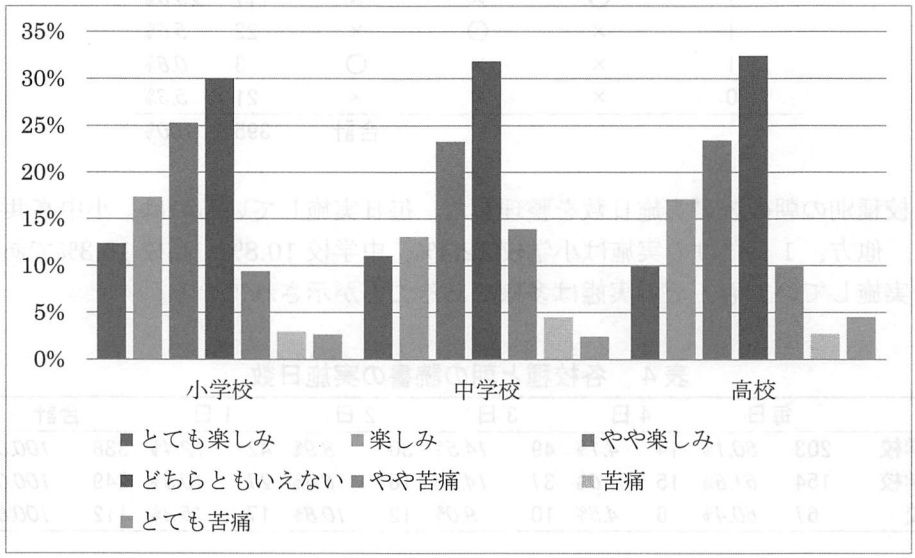

図１　「朝の読書をどのように感じましたか」に対する校種別回答の割合

表７には、読書習慣の形成の有無は、小学校が 35.0%と最も高く、中学校 29.1%、高校 20.7%と低減していくことが示されている。この回答と、**表３・４・５・６**の結果をクロス表に整理して χ^2 検定を行った。有意な差が得られた結果について以下に示す。

表７　各校種における読書習慣の形成状況

	小学校		中学校		高校	
はい	135	*35.0%*	107	*29.1%*	69	*20.7%*
どちらともいえない	87	*22.5%*	80	*21.7%*	64	*19.2%*
いいえ	164	*42.5%*	181	*49.2%*	201	*60.2%*
合計	386	*100.0%*	368	*100.0%*	334	*100.0%*

朝の読書の有無と読書習慣の形成では、前回 2009 年度の調査と同じく各校種共に有意な差が見られた。朝の読書を実施している学校では読書習慣が形成されたと回答する割合が高いことが示された（次頁　**表８**）。

朝の読書に対する意識と読書習慣の形成に有意な差が表れている。朝の読書活動そのものに対する否定的な評価をしている者ほど、読書習慣の形成が図られていない。つまり、朝の読書に対する肯定感と読書習慣には親和性があることが示されている（次頁　**表９**）。

表８　「朝の読書の実施の有無」と「読書習慣の形成状況」のクロス表

朝の読書の実施の有無		読書習慣の形成状況 はい	いいえ	どちらともいえない	合計	χ^2値	有意確率
小学校	はい	128	132	77	337	13.86	0.00
	いいえ	7	32	10	49		
	合計	135	164	87	386		
中学校	はい	84	102	57	243	15.95	0.00
	いいえ	23	79	23	125		
	合計	107	181	80	368		
高校	はい	40	47	22	109	28.06	0.00
	いいえ	29	154	42	225		
	合計	69	201	64	334		

表９　「朝の読書評価」と「読書習慣の形成状況」のクロス表

朝の読書評価		読書習慣の形成状況 はい	いいえ	どちらともいえない	合計	χ^2値	有意確率
小学校	肯定	103	35	48	186	92.28	0.00
	保留	22	55	24	101		
	否定	3	43	5	51		
	合計	128	133	77	338		
中学校	肯定	63	25	26	114	55.94	0.00
	保留	18	36	21	75		
	否定	3	39	9	51		
	合計	84	100	56	240		
高校	肯定	30	12	11	53	27.62	0.00
	保留	8	19	9	36		
	否定	1	16	2	19		
	合計	39	47	22	108		

表 10 は、教師の読書活動の有無と生徒の朝の読書に対する評価で有意な差が見られたクロス表である。他の校種や他の質問項目とのクロス表においては、有意な差を見いだすことはできなかったが、高校における教師の読書活動のみ生徒の朝の読書に対する評価との間に有意差が見られた。

表 10　「教師の読書活動の有無」と「朝の読書評価」のクロス表

		朝の読書評価 肯定	保留	否定	合計	χ^2値	有意確率
高校の時、朝の読書の時間に先生も本を読んでいましたか。	はい	24	10	8	42	9.27	.05
	両方	18	20	4	42		
	いいえ	14	5	7	26		
	合計	56	35	19	110		

質問項目⑫では、小学校は１冊、中学校は２冊、高校は３冊までの著者と著名を自由記述で求めた。本調査と前回の調査結果を比較するために、未記入を空欄として集計し、空欄率を算出したものが**表 11** である。今回の方が全ての校種で未記入が増加していた。

表 11　各校種における思い出に残る著書の空欄率

	小学校	中学校	高校	回答者数
2014 年度	0.23	0.90	1.72	395
2009 年度	0.17	0.74	1.42	219

自由記述で朝の読書に関する意見や感想などを記入されたものを、肯定、否定と、どちらの評価も記載されている内容のものを保留として分類し整理した（**図２**）。自由記述内容の評価を比較すると、若干の増減が見られるものの概ね同じ傾向を得ることができた。

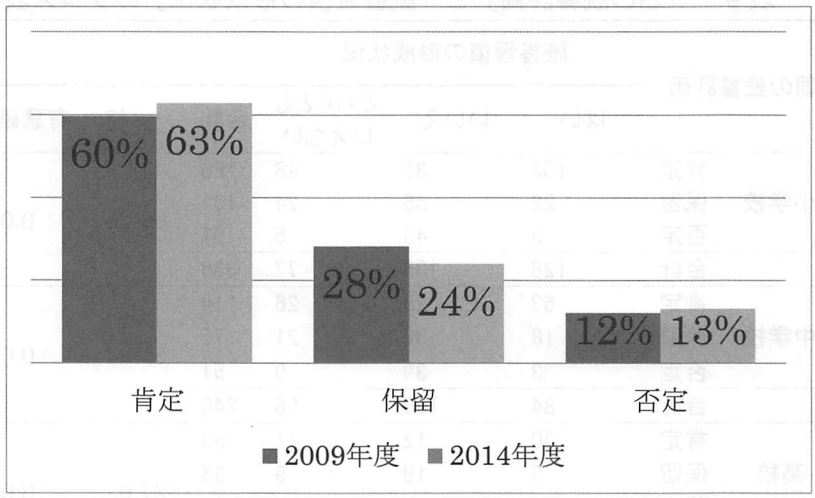

図２　自由記述による朝の読書の評価の比較

結果の最後に、本調査の対象学生が学んできた各校種の設置者について述べておく。既述の如く西日本出身者が多いことに加え、出身高校は国立（4.8%）と私立（39.1%）を合わせると 43.9%と高い割合を占めており、公立高校出身者は 54.7%と半数を少し超える程度であった。また、出身中学校も国立（6.2%）と私立（21.5%）を合わせると 27.7%と比較的高い割合を占めていた。このことは、いわゆる進学校と称される学校の出身者が多いことを示していると推察できる。そのため、校区に在住する生徒と比較すると通学に時間がかかること、私立学校独自の宗教教育の取り組みや、受験学力向上のための取り組み等のために、国立・私立の学校における朝の読書の実施状況は、本論文で目的としている「朝の読書の４原則」を守り実施している学校とは異なる可能性が示唆される。

４．考察

本論文における朝の読書に関する実態調査は、大学生を対象としており、回想法により実施されているために、小中高の教師が実施する質問紙調査と比較すると心理的圧力が少

なく、当時の状況について正直に回答していると思われる。しかしながら、調査対象者が西日本に偏っていることと、私立大学の文系学部という限定された標本であるために、全国的な朝の読書の実態を正確に把握するためには不十分なデータである。このことに留意しながら、以下に本調査の結果について考察する。

まず、朝の読書の4原則である「毎日やる」学校は、小中高ともに 6 割程度であった。また、教室内の教師の有無は小学校・高校では6割程度、中学校では5割程度であり、教師の読書状況は、小学校・高校では3割半ば、中学校では3割弱という状況である。これは、現行の教育課程による影響、例えば朝のドリル学習への回帰、総合的な学習の時間の減少等の影響により、朝の読書の時間確保をしにくい状況があると考えられる。

半面、朝の読書を担当する教師の意識の変化が、実践の形骸化につながっている側面を見ることができる。**表5**に示したように、朝の読書の時間に教師は必ずしも教室にいるわけではないのが実態である。また、教師が読書をしている割合も低いことから、単に児童生徒に読書の機会を与えているだけという学校も少なくないことが示されている。中西[9]は、高校の国語教師の立場から朝の読書は「読書指導の基盤」である点を指摘し、教師の指導観や指導性、朝の読書の根本的な指導原理である4原則の意義を論じている。筆者は、朝の読書を実践しているにも関わらず読書をしない教師から次のような話しを聞くことがある。それは、「朝の読書の時間にノート点検や採点（丸付け）等の事務をすることは結果的に休み時間に子どもとかかわる時間を増やせるので教師は読まなくてもよい」、「朝の読書指導は教師の職務内容ではない」。このような反論に対して、前述した中西の省察には、高校だけに限定されず、小学校・中学校において急増している新任教師にも理解してほしい朝の読書の教育的な意義が述べられている。教師は、「毎朝、（各自が）好きな本を、（教師を含めた）みんなで、ただ読むだけ」という4原則を徹底することが、広義の人間性教育であること、朝の読書が読書指導だけに留まらないことを理解することが肝要である。

本調査では、高校における教師の読書行動は、生徒の朝の読書に対する評価と有意な差が見られた。このことから、教師の生徒と共に本を読むという行動が生徒に一定の影響を与えているものと推察できる。また、視点は異なるが、思想家であり近年まで大学教授であった内田樹氏は、朝の読書が担当学生の卒業論文の対象となったことを契機として、自身のブログ（2008年10月8日）において朝の読書を次のように述べている[10]。「私が『朝の読書』ということの有効性をうまく理解できなかったのは、『読書』という語に惑わされていたからである。あれは『読書』ではなく、『読字』だったのである。（筆者中略）重要なのは『文字を読むこと、それ自体』なのである」。ここには、朝の読書が読書指導とは異なることが端的に語られていると思われる。

次に、ICT機器の急激な進化と普及に伴う電子メディアによる影響への対応を考えていくことが求められている。本調査結果においても、ケータイ小説や、アニメ・ゲームに関する本が多数回答されていた。また、紙媒体とは異なる端末（例えばiPad）の利用の可否等、学校現場では、従来の紙面上の活字文化とは異なる新たな情報機器の活用が始まっており、朝の読書においても、どのように対応していくのかが問われているのである。さらに、朝の読書は、特別支援教育に関連するインクルージョン教育（Inclusive Education）等の新たな教育課題にも応えていかなければならない。本調査結果では、朝の読書に対して否定的な評価をする学生が少なからず見られた。その自由記述の内容には、朝の読書に

おいて、ディスレクシア（Dyslexia）、学習障害（Learning Disabilities）等を抱えもつ児童生徒をどのように支援していくのかという問題が示唆されていた。この他にも、経済格差に起因する家庭の社会的資産格差への対応も喫緊の課題である。本調査は大学生を対象としていたが、朝の読書の対象者は、高卒者、高校中途退学者、中卒者等、さまざまな生徒がいることに留意しなければならない。つまり、家庭教育支援や放課後の学童保育の充実、ならびに、児童館や地域の図書館活動等との連携のあり方を再検討し、社会全体で児童生徒の読書環境を豊かなものにしていくことが必要である。特に義務教育段階では、本が身近にない家庭もあることに配慮して、地域の図書館と有意義な連携を図りながら学校図書の環境を十分に整えること、学校生活の中に読書の機会を保障し、黙読習慣がないために活字離れをしてしまう児童生徒を低減させるため、読書に親しませる一層の工夫が必要である。その基盤は、家庭・地域・学校が一体となった、全校一斉朝の読書の正しい理解に基づいた確かな実践にあることを指摘しておきたい。

本論文の最後に、朝の読書と「一人でいられる能力（ability to be alone）」の育成について述べる。ウィニコット（Winnicott, D.W.）は、一人でいられる能力の獲得を幼児期の能動的な一人遊びに見いだしたが、現在の日本の子どもには、その能力が十分には育まれていないように思われる。朝の読書には、この能力を育てる可能性があると考えている。なぜならば、朝の読書では、個人の責任において読む本を決定し、自らの意志で継続し、主体的に一人で取り組む活動である。そこには、読書を通して一人でいることを実感し、自己内対話の世界が構築されていく。この点については、今後の研究の課題としたい。

---

1 中村豊「朝の読書 morning independent reading activity in school」（日本生涯教育学会『生涯学習研究ｅ辞典』」http://ejiten.javea.or.jp/、2015 年 4 月 11 日参照）

2 中村豊「「朝の読書」に関する縦断的研究の試み」（『日本生涯教育学会論集』31、pp.73-82、2010）

3 林公『朝の読書 その理念と実践』編集工房一生社、リベルタ出版(販売)、2007

4 本調査は随時各都道府県の小・中・高校（国立・公立・私立）の実態をアンケート調査しているもので、学校から回答のあったデータのみをカウントしている。本稿では、平成 27 年 3 月 30 日現在の結果を参照した。朝の読書推進協議会「「朝の読書」全国都道府県別実施校数一覧」（http://www1.e-hon.ne.jp/content/k_46-0215.html/、2015 年 4 月 9 日参照）

5 全国学校図書館協議会は毎日新聞社と共同で、全国の小・中・高等学校の児童生徒の読書状況について毎年調査を行っている。

6 アンケート実施期間は 2013 年 10 月 1 日から 11 月 30 日まで。トーハン「「朝の読書」２５周年記念アンケート結果」（http://www.tohan.jp/news/20140128_101.html/、2015 年 4 月 9 日参照）

7 全国学校図書館協議会「「第 60 回読書調査」の結果」（http://www.j-sla.or.jp/material/research/54-1.html/、2015 年 4 月 9 日参照）

8 文部科学省では、学校図書館への司書教諭等の配置状況や図書の整備状況、読書活動の状況等を調査しており、平成 20 年度調査以降は隔年で実施している。

9 中西英代「読書指導の推進――一斉読書を基盤として―」中洌正堯・国語論究の会著『高校国語実践の省察と展望』三省堂、pp.196-207、2014

10 内田樹「内田樹の研究室」（http://blog.tatsuru.com/2008/10/08_1220.php/、2015 年 4 月 11 日参照）